

【堀越千秋というアートワールド】

2025年元日、念願の美術書『少年アート』をゲットした。私の信頼する人々の間でかなり評判になっていた。1986年の発刊時に1,800円だった本がなんと今では10,000円を超えていた。人類は長い年月を要すれば必ず真実を見出す、などと勝手に解釈してみた。ロンドンでアートを学んだ著者中村信夫氏が見ていた世界観は、ネット環境も整わない当時の人々にとって理解しづらかったはずだ。

2015年、福岡初のアートフェア《AFAF》を立ち上げた私は、世界と日本との間に横たわるアートにおける価値のズレがずっと気になっていた。しかし、この本はそんなモヤモヤを一気に取り払ってくれた。

文中に書かれていた単語「アートワールド」、それは、“各国にわずかしか存在しない。世界中のギャラリーや美術館で個展を行いながら、今後のアートヒストリーに名を残す可能性の高いアーティストたちの形成する場”と記されている。アートワールドに刻印を打ち込むことができるかどうか、そこに向けての活動こそがキャリアアップに繋がる。いったいこの国ではどれほどのアーティストやアート関係者が認識しているのだろうか。

近年、アートフェアやオークションはアートワールドに大きな影響力を持つと言っても過言ではないだろう。そう考えると《AFAF》の広がりや《九州派》の高まりにも納得がいく。こうした背景を後ろ盾にして、今私が最も着目するアーティストが“堀越千秋”だ。かつてこれほどまでに規格外、インテリジェンスでありながらも怪物的、そんな絵描きがいただろうか。堀越は私たちが普段口にする絵描きという概念では計り知れない存在だ。彼の生き方、言動、振る舞いそのものに多くの人々が吸い寄せられた。誰もが簡単に芸術家を標榜し、閉塞感に満ち殺伐とした今だからこそ堀越の作品や生き様に真摯に向き合いたいと思う。

堀越は親子三代に渡る絵描きの血筋を受け継ぎこの世に生を受ける。1974年東京藝大を首席で卒業した彼にとって日本は狭すぎた。九州派の桜井孝身が1960年代に日本を飛び出しアメリカ、フランスに居を構えたように、彼はスペインへと向かった。日本人特有の「わび・さび」を根底に、芸術国家スペインで培った精神風土を具現化させた。彼が創造した美は絵画だけに止まらず舞台美術、壁画、書、版画、陶芸、エッセイ、新聞各紙の挿絵、絵本、カンテフラメンコ。スペインと日本のメディアは競うようにドキュメンタリーを放送した。堀越の存在は人々を魅了し続けた。彼が創造したものは作品だけではなく、堀越千秋そのものが芸術となった。あらゆるもののが堀越の身体を通して創造物となって生まれ変わる。大いなる感覚器官と呼ばれた所以である。

魅せる生き方とはどのようなことなのか、堀越が亡くなった時、本場フラメンコ発祥の地スペインでは絵描きとしてだけではなく、偉大なカンタオール(フラメンコの唄い手)が亡くなったとの声明を出した。カンテフラメンコ最高峰と呼ばれたマヌエル・アグヘータやそのファミリーと共に演ずる堀越のカンテは本場スペインの人々の度肝を抜いた。2014年にはスペイン国王よりエンコミエンダ文民功労章を授与されたほどだ。2016年、堀越はその半生を捧げたスペインで帰らぬ人となる。ANA機内誌「翼の王国」のアルタミラ洞窟壁画取材の直後だった。週刊朝日「美を見て死ね」の著者でもあった堀越はあっという間に散ってしまった。

私たちがアートを享受する際、常にアートワールドを意識することが大切である。天才を見出せない世の中は不幸だ。結果、世の中は虚構で溢れてしまった。アーティストの才能を見出すことは人々に真実を見極めるセンスを養う。日本における真のアートワールドの確立は急務だ。このまま無味乾燥な世となるのか。あの堀越の屈託のない笑顔を思い出してほしい。アートはもっとワクワクするもの、世の中に真の豊かさをもたらすものなのだ。

アートワールドの創造を見据えた実験は、“堀越千秋の芸術”再発見とともに今始まったばかりだ。

一般社団法人 アートフェア・アジア福岡 理事/Gallery MORYTA 代表 森田俊一郎